

- ・秋風のつきさすような冷気はまるで刀のそれのようなのに、我が肌身にはつきさせても、私のこの深くこもった愁いは破つては（消しては）くれない。
- ・そんな月の光を見るにつけ、秋風の音を聞くにつけても私には、身震いがおきるほどすさまじく感じられる。
- ・（一般に秋は人々にとり悲しい季節であるけれども）とりわけ今年の愁えは、わが身の上に集まり、私にだけに悲しみが限りなく深いように思えてならないことよ。

## 考察

### 「五句目「月光似鏡無明罪」の表現について」

『菅家文章』『菅家後集』の中で「月光」を「鏡」にたとえる表現はこの「485 秋夜」の他にも散見するが、一方で「鏡」と「無明罪」の表現との関わりについては『菅家文章』「254 對鏡」に注目する必要がある。この詩と、『白氏文集』との関わりについての考察を既に拙稿で論じた（注二）ことがある。ここでは「鏡」そのものの語を考察する為に再度原文の一部と書き下ろし文を岩波古典文学大系本より引用してみる。（一部、筆者試読）

#### 254 對鏡

四十四年人

四十四年の人

生涯未老身

生涯未だ老身ならず

我心無所忌

我が心忌む所無し